なぜ病弱な聖者と、健康な悪人がいるのか

ラリー・ドッシー医学博士（Larry Dossey, M.D.）

☆

ラリー・ドッシーは講演者、著述家としても活躍する医師。主な著書に『Reinventing Medicine』『Healing Words：The Power of Prayer』がある。
この記事はハーパー・コリンズ社の許可を得て『Practice of Medicine』より抜粋したもの。

（ラリー・ドッシーの著書は『祈る心は治る心』『平凡な事柄の非凡な治癒力』『癒しの言葉―よみがえる「祈り」の力』『魂の再発見―聖なる科学をめざして』『時間・空間・医療』等々、数多く邦訳されています。― ECCJ スタッフ　）

☆

　話を聞いた人々が思わず困惑する歴史上の有名人の病気に、今からかれこれ 2500 年前の覚醒者、仏陀の食中毒があげられるだろう。
彼はいたんだ肉を食べて食中毒になり、死んだ。腐りかかった肉は彼の最後の食事となった。

　この話を知った当初、仏陀ともあろうお方の最後にしては、あまり高尚とは言えない…と私は思った。
私は腐った肉よりもっと、威厳にみちた死因を期待していた。
しかしあとになって、このケースが決して珍しいものではないことがわかった。
偉大な霊的精神的指導者の多くは、痛みに苦しんだ挙句にグロテスクとも言えるような死をむかえているのだ。
比較的最近では、次のようなことが起こっている。

○　聖女ベルナデットは 1858 年、ルルドで聖母マリアのビジョンを見た。
　それからルルドの泉では、何千という奇跡的癒しが報告されている。
　しかし聖女ベルナデットは、彼女自身が必要としたときにはその癒しを受けなかった。
　死因は、骨のガンとも伝染性の結核とも言われている。
　35 才だった。

○　ジュドー・クリシュナムルティーは、高名な霊的教師だ。
　彼の言葉は、世界中の何百万もの人々を勇気づけた。
　死因は膵臓ガンだった。

○　鈴木老師は、禅仏教を日本からアメリカに伝えてサンフランシスコ・禅センターを創設した。

死因は肝臓ガンだった。

○　シュリ・ラーマーナ・マハリシは、現代インドでもっとも敬愛された聖人だった。
死因は胃ガンである。

このリストは延々と続けることが出来る。
歴史はあきらかにしてくれる。
もっとも威厳ある覚醒者や解脱者、神秘家の健康状態は、理想とは程遠いのだ。
しかし病気がちな聖者たちは、病を自然の摂理の一環として受け入れているようにみえる。

インドの偉大な賢人、シュリ・オーロビンド（1872～1950）はある日、階段で足を踏み外して転び、膝を骨折してしまった。
治療にあたった医者は、これに当惑して言った。
「マハトマ。なぜ、あなたともあろうお方がこの事故を予見して未然に防ぐことがお出来にならなかったのですか？」
オーロビンドは答えた。
「私は生身の身体を持っているのですよ。これが、人間の限界と物理の法則に従うものでしてねえ。」
このような出来事に対する「説明」はたくさんある。

悟っているだの、聖者だの、神秘家だのと言っていても、本当のところは大した人間ではないのだ、という説明がある。
本当に悟っているのだけれども、カルマが働いて前生の罪や短所のうめ合わせをしているのだ、という説明もある。
人間として優れた教師は、熱心な弟子や信奉者の病を、自分があたかもスポンジになったようにして無意識のうちに吸い取ってしまうのだ、という説明がある。

聖人や賢人たちは自ら病気を選択するのだ、という説明もある。
つまり彼らは、人間の精神に宿る高貴にして聖なるものが、忌まわしい病の最中でさえ清く美しく保たれることを大勢の人々に知らしめるために、しばしば病を選択する、というのだ。
あるいは自意識やエゴの痕跡を燃やし尽くすための最後の試練として、故意に病気にかかるともいう。

☆

こういった説明には一理あるかもしれないし、ないかもしれない。
私たちは、神の理や宇宙の真理を悟った人々が、なぜ病気になって死んでしまったのかその原因をここではっきりさせよう、としているわけではない。
そうではなくて、聖者と言われる人々でも病気にかかって死ぬことを認識したうえで、私たち自身が病気になってしまったときに、それをどう考えて受け止めたらよいのかを問いかけたいと思うのだ。

聖者の聖者らしからぬ死によって、私たちは結局のところ、広く承認されている仮説に対して真剣な疑問を投げかけざるを得なくなる。
その仮説とは、
(ａ)正しく清らかな人間であるということによって、素晴らしい健康が保証される
(ｂ)健康でなかったり病気になったりするということは、精神的霊的な欠陥を暗示している
というものだ。

この仮説は精神的人格的エリートたちにとってだけでなく、あなたや私のような一般人にとっても正しくない。
聖書にこうある。
イエス・キリストが、盲目に生まれついた男に出会ったとき、弟子は尋ねた。
「師よ、この男が盲目に生まれついたのは、誰が罪を犯したからですか？
この男ですか？
それとも彼の両親ですか？」

この疑問は、今日のニューエイジブームの流れの中で登場するさまざまな疑問と、表現は異なるがその本質は同じだ。
誰が間違っているのか？
なぜ私はこの病気にかかったのか？
私は現在や過去のどんな過ちのために、今こうして病気で苦しんでいるのか？
病気という罰を受けるべきは誰か？

イエスの答えは、私たちの心に健全な自信を取り戻してくれる。
それは、意識と癒しについて語っているニューエイジの本の全てに掲げられるべきだろう。
「この男が罪を犯したのでも、両親が犯したのでもない。
神のみ技が、彼を通して顕れるためである。」（ヨハネ９：1～3）

イエスのこのメッセージを、もっと大勢の人々に認識してもらうにはどうしたらよいのだろう。
この盲目の男は、精神的な欠陥がない状態でも、その肉体が深刻な病に蝕まれるというその例だ。
誰かの人間性が足らないわけではない。
犯した罪の為に誰かが罰を受けるのでもない。
病気になることを選んでいるわけでもない。

「・・・神のみ技が、彼を通して顕れるためである。」と答えたイエスは、病気というものには神ならぬ人の身には理解しがたい、高い次元での目的があることを暗示していると言えよう。
一人一人の病気の意味というものも、広大無辺な宇宙と同じように計り知れないものなのだ。
それゆえそれは多分、神だけが知っているようなことであって、死すべき運命にある人間に対しては被

い隠されていてはっきりしないことなのだ。

　要するに盲目の男のこの話は、霊的精神的な健康と肉体的な健康を全く同じ次元で考えることに警鐘を鳴らし、病気の意味を、表面的に浅はかに解釈をすることに警告を発しているのだ。

　病弱な聖者や賢者と対極の存在がある。
やたら元気なならず者、とでもいうのだろうか。
霊的な事柄とは一切無関係で、風邪一つひかないような人々だ。
あなたの周りにもこういった人間が一人くらい居るだろう。
あるいはうわさに聞いたことがあるだろう。
彼らは不健康の限りを尽くして気の向くままに煙草を吸い、酒を飲み、挙句に百まで生きるのだ。
それも病気一つしないでだ。

　病弱な聖者と元気なならず者をみればわかるだろう。
肉体的な健康と、霊的精神的な完成度のあいだには、直線的で一定な比例関係などないのだ。
人間として驚異的に素晴らしい状態に到達していながら非常に病気がち、ということは起こりうるのだ。

　人間としての成長や進化の度合いと、肉体的な健康とのあいだには単純な比例関係があると信じている人々の多くは、〈内なる神〉というものを考える。
人間の内側には至高の存在、すなわち神の一部かあるいは神と同質のものが住んでおり、その〈内なる神〉によって健康が保たれる、という考え方だ。

　しかし人間の内側にそのような神性があるにもかかわらず、人の心が普段その神性を十分に反映していないことは明らかだろう。
私たち人間は毎日いろいろなところで、神のごとき完璧さとは程遠いことをしているではないか。

　私たちが内側に〈内なる神〉という神と同質の何かを宿しているように、私たちの肉体は肉体の内に私たちを宿している。
そして私たちが内なる神性を十分に反映できないのと同じように、私たちの肉体は内側の私たちを十分に反映できない。

　私たちが神の性質を完全に表現出来ないからといって、私たちの内に宿る神は仕事がいいかげんだとか、間違っているとかは言わない。
それなのになぜ、肉体の故障はそこに宿る私たちがいいかげんで間違いを犯している証拠だ、と主張するのだろう。

　物質である身体は、扱いにくく頑固だ。
遺伝性の病気もあり、感染症、伝染病に弱いなどなど、多くの点で不都合な性質を持っている。

身体というものは「身体自体の意識」を持っているのであって、私たちが精神的、霊的に理解していることを常に正確に表現してくれるわけではない。

　私たちの身体は、「身体自体の意識」によって暴れたがったり動かなくなったりする。
私たちに相談なく病気にもなる。
私たちに対する身体のこの不従順さを十分に認識することが出来なかったために、心と健康の関係に注目する昨今のムーブメントは、たいへん極端な方向に走った。
それは物事をむしろ悪化させる原因にすらなった。

☆

　自然界をひとわたり見まわしてみるなら、物質から成る身体の不都合な性質はいくらでも目につく。
植物も動物も、私たちのように病気にかかる。
私たちとまったく同じように、ガンや関節炎やウイルス性の、あるいは細菌性の感染症にかかる。
動物も事故に遭遇し、トラウマを抱える。
老齢や老衰の問題も抱えている。
しかし動物や植物が病気になると、私たちは彼らに対しては人間に対するのと違う態度をとる。

　私たちは動植物を、裁いたり責めたりしない。
この木はガンになったから、害虫がついたから、あの木よりも悪い木だとは言わない。
股関節の形成異常は、犬の心がけが悪いからだとは言わない。
白血病に倒れたからといって、生まれながらに欠点の多い猫だとは言わない。
自然界では、病気は自然の摂理の一部分だと見なされる。
倫理的、道徳的、霊的な弱さのしるしとは見なされない。

　生き物の具合が悪いとき、私たちはいつもより愛情を込めて大切に扱う。
ところが自分自身に対してはそうしない。
ニューエイジャーの人々のほとんどは、お気に入りのバラの植え込みにアブラムシがついた時に、バラを責めようとはしない。
しかし自分が敗血性咽頭炎で寝こむと、いそいで懺悔すべきことを捜し始めるのだ。
言うまでもなく、私たちは他の自然の生物と同様に自然の一部だ。
他の生き物が病気になったときに私たちがそれに示す優しさや赦しや寛容を、自分たちにも与えた方が良いのではないだろうか。

　これは私たちの身体と心とが関係していることを否定するものではない。
身体と心が無関係でないことは確かだ。
しかしそのことに関する私たちの知識はあまりに不完全で、普遍的なものからは程遠い。
深刻な病の根本的な原因など、私たちにはいかなる場合においても分からないかもしれないのだ。

　霊性と癒しの関係についても、私たちの理解は不完全だ。
その事実を私たちは認識すべきだ。
「ここに大いなる謎がある」のだ。
私は「謎」という言葉によって、情報が増えれば解消してしまうような一時的な無知の状態を表しているのではない。
今後の研究によって、いつの日か解くことのできる疑問を意味しているのでもない。
「大いなる謎」とは、どのようにしても人間が知ることのできないもの、本質的に人間の理解を超えているものなのだ。

　ときとして聖者が悶え苦しみ、罪人が安逸をむさぼるという事実だけが謎なのではない。
謎はたくさんある。
たとえば願い事を具体的に述べない非指示的な祈りのほうが、願いの内容をはっきりさせている指示的な祈りよりもパワフルである、という事実が多くの実験によって確かめられているが、これも矛盾であり、人の理性による解明を拒むような謎をはらんでいる。

　意識的な心よりも、無意識的な心のほうが癒しをもたらす、ということもそうだ。
祈りの効果が実験室においては証明できるにもかかわらず、実験室以外の場所では効果など予測不可能だということもそうだ。
このようなことは他にもたくさんある。

　謎は気になって仕方がないものだ。
謎は解答を要求する。
私たちは物事を、灰色なしに白黒はっきりさせたいと思う。
謎に出くわすと私たちはそれを解こうとして必死に努力する。
しかしそれは徒労に終わる。

　今まで見てきたように、人間として目覚ましい進化を遂げ成長した人物の重い病について説明し尽くそう、とする努力は明らかに徒労に終わる。
心がけが良ければ病気にならない、という私たちが好きな考えを支持する根拠はどこにも見当たらない。

　癒しにおいて祈りが少なからぬ役割を果たすことや、健康と霊性との間に何らかの関係があることを少しでも知っているならば、私たちは「謎」に対してムキにならないところまで成長すべきだ。
私たちは自分の限界を認め、未知を認め、「謎」を快く許容できるようになるべきだ。

☆

　さて、もしもガン患者が意識的に感謝や受容の気持ちに溢れた態度をとり、不安や憂鬱を抱かないよ

うに努め、心から素直に祈り、周囲との人間関係を良好に保ち、明るく前向きな気持ちの、申し分ない善人になったらどうなるだろうか？
ガンは消えてなくなるだろうか？
誰でもやってみるなら成功するような、ガンを自然治癒させる方法が、果たして本当にあるだろうか？

実のところ、西洋医学の訓練を受けた医者の多くは、全てのガン患者にあてはまる、ガンを治すミラクルな方法がどこかにあるはずだと信じている。
患者がその方法を発見できさえすれば、奇跡的な快復も起こりうるのだと考えている。
しかし、カルフォルニアの内科医で執筆家であるレイチェル・ナオミ・リーマンは、死を目前にした人々や重篤な病の人々を対象にした研究で広く知られているが、次のように語っている。

「私は 20 名弱の病院の同僚に、彼らの患者にとって望ましい…つまり、余命を伸ばす効果のある感情が何なのか、はっきりさせることができるかと尋ねたことがありました。
医者も心理療法家も皆、ある種の感情は他のものより好ましいと思っていました。
しかし生き延びることと、感情や態度との関係は、誰にとってもはっきりしませんでした。
ガンの専門医も含めてです。

誰もが、明るく朗らかで愛情豊かなのに死んでしまった人や、嘆いてばかりいるのに生きている人、怒りっぽいのに病気になったことがない人、自分自身を癒すことのできなかったユーモアに溢れた人を担当したことがありました。
それでも皆直感的に、感情が癒しに影響を与えると考えていました。

これは不思議といえば不思議です。
感情と病状との関係を研究するためにはおそらく、人の観察に頼らないですむような精巧な道具が必要なのです。
感情を正確にはかるには、たとえば免疫学のそれに匹敵するようなきわめて高度な知識が必要でしょう。
でも私たちはまだそこまで行っていません。」

私たちの時代は、自分で自分を救おうとして、かえって泥沼にはまり込んでしまっているようだ。
タブロイド紙やトーク番組は、一週間のダイエットプラン、性感を高める方法、ガン撃退法といった情報を、やかましいほどに与えてくれる。
こういったものにはまるで呪文が潜んでいるようで、あたかも催眠術のように作用する。

その催眠術の結果、私たちは、従うべき知恵は自分自身の外にあると思うようになる。
名乗りを挙げた無数の専門家、コンサルタントの頭上高くにバイパスを通して、自分に本来備わっている癒しの力に到達しようなどということは、大方の人は思いつくことさえできなくなる。

さらに、もしガンが治らなくても、それは受け入れることの出来るものであり、むしろ正しい場合も

あるのだという洞察力は、もっと稀になる。
そのような洞察力と対照的なものが、山ほどいるニューエイジ系健康専門家のアドバイスだ。
彼らは彼らのアドバイスに従えば期待できる素晴らしい成果について、際限なくしゃべり続け、書き続けている。
性格や人間関係、目標、考え方の癖、人生哲学、人生全般にわたる指針といったものを変えるための“彼らお勧めの方法”に、本気で積極的に取り組ませようとする。

彼らのアドバイスは、ガンやその他の病気の原因は、患者の人生と人格の不完全さにあると言っているようなものだ。
患者が何とか勇気をふりしぼって素直に欠点を認めて正直に正すならば、奇跡が起こると彼らは言う。
彼らのアドバイスに共通することは、肉体面での奇跡にも心理面でのそれにも、必要なものは、愛と赦しと開かれた心なのだ。

健康問題のグル達は、万華鏡を覗いているかと思いたくなるほどに、多種多様、変幻自在な方法の数々を提示してくれる。
ダイエット、運動、瞑想、ビタミン、ハーブ、ボディワーク、笑うこと、前向き思考……などなど、数え上げればきりがない。

この一連の取り組みは、ユング派の心理学者、ジェイムズ・ヒルマンが「レインメーカー・ファンタジー」と呼ぶ原始呪術的な考え方と同じ類のものだ。
「レインメーカー・ファンタジー」とは、どこかにレインメイカー（雨を降らせる人）という存在があり、レインメーカーが仕事をするとき雨が降る、という一種の迷信だ。
ニューエイジの健康概念の中でこの呪術的考え方は「私が自分を正しくするとき、私の病は消える」という迷信を生む。

こういった神話的な話が持ちこたえている理由の一つに、患者一人一人の体験を別々に見ている限りは、間違いがわからない、ということがある。
もしもアドバイスに従っても癒しが起こらなかったならば、それはアドバイスが間違っているのではなくて、患者が一生懸命取り組まなかったからか、あるいは本当は治りたくないからだと言われる。

アドバイスに従って、治る人も中にはいる。
実際、たまには何かが起こるように見える。
しかし、厳密かつシステマチックな吟味には、アドバイスの内容は持ちこたえることができない。
ある研究で、自己を変容させるための、かなり厳しい方法に従ったガン患者達は、対比グループの通常の医学的治療を受けた患者達にくらべて、少しも良くならなかった。
自分自身で自分を救おうとしている人々にとって、通常の医学的治療というものは、彼らの価値観と対極にあって、あまり評価されることのないものなのだが…。

祈りや瞑想や、その他何であれ心理的、霊的方法によって、ガンや他の病気が治せるということを実証して見せることは、誰にもできない。
マイケル・レーナー博士は、カルフォルニアの対ガンプログラム社会福祉協会の設立者であり、会長でもあるが、この団体は人間の健康と生態環境の問題に取り組み、成果をあげている。
この十年間、レーナーはガンの代替療法の研究に取り組んでおり、この分野ではおそらく合衆国最高の権威だろう。

彼は、ガンの特殊な治療法に関する技術評価局のレポート作成の特別顧問を務めていた。
10 年にわたる調査に基づいて彼が出した結論は、これら特殊な治療法を調査したところ、実際それによって治癒が起こったことを確認できなかったうえに、一般的な治療方法に従った場合と比べて、寿命が多少なりとも延びたと断定できるような客観的証拠は、ほとんどなかったというものだ。
それらの治療法には、人生を質的に向上させるという「逸話」がたくさんあるにもかかわらず、そうなのだ。

さて、病気が治ることを祈っているたくさんの人々は、実際にそうなると当惑して考え込んでしまう。
スーザン・エルツが書いているように、「死なないことを切望する人々は、もしそれが叶ったら、雨降りの日曜の午後などには、何をして時間をつぶしたら良いのかわからなくなってしまう」のだ。
一体何が起こったのか？
どこから癒しがやって来たのか？
なぜそれが起こったのか？
私の治癒は何のためなのか？
病気が治ってしまったら、私は何をしたら良いのか？
奇跡的治癒を体験した人々はそう自問自答する。

☆

祈りや自己変革の試みが失敗して、病気が進行したとする。
しかしそれでも治癒は起こりうるのであり、そこに大きな意味がある。
ここで私は、治癒、という言葉によって肉体的な病の消失、つまりガンや心臓病、高血圧、発作の症状が改善されることを意味しているわけではない。

そういうことではなくて、人間の素晴らしい認識力について私は言いたい。
肉体的な病がどんなに辛く見苦しいものであっても、そんなことは、人間という存在全体が生きる中では二次的な意味しか持たないのだと認識する能力が私たちにはある。
そのことに大きな意味があるのだ。

人間の本体であるハイアー・セルフは、どんな病による肉体の崩壊にも影響を受けない。
これに気づき始めると、私たちには良くわからない理由によって、病気の進行は鈍るかもしれないし、

あるいは治ってしまうかもしれない。
そうなればそれは天からのプレゼントであり、祝福であり、恩寵なのだが、しかし忘れてならないことがある。
それはあくまでも二次的なものだということだ。

　真の治癒というものは、私たちはもっとも根源的なレベルにおいて、病や死による崩壊の全く及ばないところにいる「アンタッチャブル」な存在だということを、実感することなのだ。

＜2001 年 9、10 月号より＞